

TO FUTURE

東日本大震災一年 未来祈念誌



世界と、その未来へ向けて
穏やかな明日への、祈りをこめて。



TO FUTURE -CONTENTS-

東日本大震災一年 未来祈念誌

はじめに-穏やかな明日へ / 北原亜稀人・・・ 3

よもつひらさか / 航・・・ 5

解熱 / 川田 昇・・・ 18

アリとキリギリスと空蟬 / 赤津紀一・・・ 29

Sign-From the PAST (前) / 北原亜稀人・・・ 42

ハヤテウタ / ナツ・・・ 57

手紙 / 美弥・・・ 60

もうすぐ着くよ / 村瀬有宇・・・ 62

Yes, I' m `ME、 / C.A.Rainbow・・・ 66

Sign From the PAST (後) / 北原亜稀人・・・ 70

編集後記・・・ 86

穏やかな明日へ

まずは、本書を手にとって下さった全ての方へ御礼申し上げます。二〇一一年三月十一日午後には東北地方をはじめとした広い地域に未曾有の被害をもたらした震災から一年が経過いたしました。しかしながら依然としてその災害の全容は明らかになつたとは言えません。福島原発の問題解決にはまだ長い年月が必要でしょうし、我々の頭上を覆う放射能問題は今後、百年単位で向き合っていかなければなりません。それに加え新たな活断層の発見や、今後そう遠くない未来に次は首都圏に大規模な地震がやってくる可能性の指摘などが加わり、我々の生活の上に真の意味での平穏が戻ってくるのは、なんだかずいぶん先になりそうな様相を呈しています。しかし、だからと言って毎日を、怯え、ふさぎ込んで過ごしていくわけにはいかないのも事実です。どうしていようと時間は流れてしまう以上、少しずつでも、きちんと前を向くようにしていかなければ物事は悪化の一途です……という言い方は多分に一般論的で、皆さんそれぞれの立場や状況を考慮していないものですね。申し訳ありません。

私達「ネイヤーズ」は地道に活動を続けるインディーズアーティスト、作家を支援しています。地震発生以降、多くのアーティストや作家が関連作品の発表を続け、多くの人々に勇氣や力を与えております。何かを創ることにこだわりを持つ私達も出来ることをしよう。そう考え企画されたのが本書です。何か、出来ることがしたかった。ただ自分自身でブログに小説やエッセイを書くだけではない、それを超える何か。考え、色々な人からご意見をいただき、同じように活動するアーティスト、作家諸氏から作品を募り雑誌としてリリースすることが決定案となつたのが昨年十一月、そこから公募をさせていただき、有り難いことにご賛同いただける方から作品のご応募を多数賜りました。各々がテーマに基づき制作した作品群を是非お楽しみ下さい。私自身も一人の書き手として短編小説を収録させていただきました。それぞれの作品が少しでも明日を生きる力に、平穏な世界への祈りの力になればこれに勝る幸せはございません。どうか巻末まで宜しくお付き合いください。お願い申し上げます。

総合インディーズアーティスト支援レーベル

ネイヤーズ 代表 北原 亜稀人

セレクトブックショップ

キズナバコ

ネイヤースが運営する厳選書籍のオンラインブックショップ、それが「キズナバコ」だ。文芸作品を中心に自信を持ってお薦め出来る良書をセレクトして全力プッシュする形で運営しており現在は詩集や評論集を中心に良書を世に送り出し続けている「コールサック社」の書籍を版元欠品以外全て取り扱っている他、自社企画の電子書籍を取り扱っている。また、2月29日まで原稿を募集している「東日本大震災一年 未来祈念電子雑誌」等ネイヤースレーベルの制作企画と連動した企画書籍や企画電子書籍を今後順次販売していく予定としている。併せてネイヤースもこの春からの紙媒体書籍刊行計画を明らかにしており、今後の商品展開には要注目だ。2月中旬から三月中旬までは「詩人のエッセイ」ならびにアンソロジー詩集で特集を組んでおり、特に力を入れて、浅山泰美「京都 桜の縁」（下段写真右）山口賀代子「離湖」（同左）をお薦めしている。前者は千夜千冊で知られる松岡正剛も絶賛した京都エッセイの代表格で、長い時を経て醸成される京都の美、縁の神髄に触れることの出来る逸品。特に表題にもなっている章は秀逸の仕上がり。後者はクセのない文章が心地良く、読んでいると心が休まる一冊で著者の文芸・歴史への深い造詣にも要注目と商品担当談。

写真の二冊はいずれも定価1500円とリーズナブルな価格設定。この価格にはコールサック社の一人でも多くの人に素晴らしい本を届けたい、という願いが込められているとの事。実際に同社商品はその殆どが比較的安価な設定となっており手にとりやすいのが嬉しい。しかも良書が勢ぞろいだ。詳しいライオンナップは<http://kizunabako.net>にて。きつと気に入る一冊が見つかる筈だ。



【担当者より】もしこの二冊を読んで「つまらん」と感じる方がいたらしやったらその方には料金をお返ししても構いません。それぐらい面白かったから全力で肩入れしております。読み終えた後も自宅の本棚、目立つところに置いておきたいくなる良書、是非一度読んでみて下さい。キズナバコでは送料無料で取扱い中！ またクレジットカード、ウェーブマネー、楽天銀行口座支払、ローソン先払い、コンビニ後払いと多彩な決済方法もご用意しております。更にGMOとくとくポイントも貯まって、使える！ 良い本を一人でも多くの方へ。キズナバコ、本日も営業中！ どうぞ宜しくお願いいたします。

詩考
錯誤

雨の気配が
遠のいていく
明日に繋がる光が
空からこぼれている
別に何かが終わった
わけじゃない。
何かが終わったわけ
じゃない。
僕は当たり前のこと
を自分に向けて
繰り返す。
何処かへ行こう。
今日が少しだけでも
上向きに終わる、
その場所を
目指して。

創りたい世界がある。
ネイヤース
<http://nevers.info>

その日、僕は
風邪で学校を
休んでいて

海ぞいの

リョーちゃん
あーまーぽ

家でずっと――

よもつひらさか航

りょうちゃん
遊ぼう

菊子
愛知で、ほら

アンタ誰

菊子…?

りょうちゃんがナミちゃん…
おばーちゃんち
来た時遊んだ

ザンザン



解

熱

川田
昇

地方都市の共通点は、大きな駅から少し歩くと、フランチやイズの香りが格段に減る事だろう。ボクが今住んでいる街は、駅から少し歩けば汲み取り式便所の醸す芳香を体感できるくらいだ。

ボクは駅近くの服屋や、カフェの並ぶ子洒落た通りを歩いていたはずだ。けれど、いつの間にか懐かしい悪臭にまみれた、昭和の町並みの中を歩いている。この辺りは生い茂る緑に囲まれ、木造の家が数軒あるだけだ。

映画のセットの様だった。モダンなデザインをした宇宙船でも、セットの裏に回れば乱雑に大道具が置かれ、照明が焚かれ、ADが怒鳴られている。この街の裏でも、そんな光景が見れるような気がした。

屋敷の一軒は商店を営んでいた。軒先に値札を付けた茶碗や鉢、花瓶が並んでいる。店の中に店主はおらず、代りに博物館にありそうな古めかしいレジが置いてある。レジには張り紙がされていた。『売り上げの一部を被災地へ寄付しています』。こんな小さな商店でも、表立って寄付を募っている事に驚いた。

陶器屋から少し進むと線路があつた。動くのか疑わしい遮断機が、物悲しく錆ついている。周囲の木々が色濃い影を落とし、陰鬱さに拍車をかけていた。



あるところに若い働き者のアリと、考え方の自由な小さなキリギリスがいた。

秋風の切りさくような寒さが、鮮やかなあかね色の葉を落としていく。そんな中、それでも一生懸命に仕事を続けるアリを見て、キリギリスは彼へ軽いあいさつをした。

「よう、こんにちは。頑張り屋さん」

「こんにちは、めずらしいね。どうしたんだい、こんなところで」

葉っぱの上で寝そべりながら、陽気な鼻歌を歌っていたキリギリスは、忙しそうな彼をながめて、唐突にぼやいた。

「いいよなあ、お前は」

「何でさ。僕は君の方がうらやましいよ」

「え？ どこが？」

「キツイ仕事をせずに、自由気ままに歌を聴いたり、歌ったりして楽しそうに生きてるじゃないか」

「はは、仕事ができなくてヒマだから、せめて楽しそうにしてないとやってらんないだけさ」

「そうは見えないけどな」

「俺には一生懸命打ち込める仕事があつて、たらふく飯も食えて、あたたかい巣もあるお前の方が、よっぽどうらやましいけどね」

—反撃開始—



<http://nevers.info/gekisen.html>

Sign From the PAST

北原 亜稀人

食べるのに困った記憶は無い。家は三階建ての巨大バルコニー付属で階段の踊り場には煌びやかなステンドグラス。外部からの陽光をそれぞれの色彩へとうつし変えて邸内の一角を飾り立てている。一階、エントランスの天井にはグレイクリスタルで仕立てられたシャンデリアまで設置されている。この館の各種インテリアを調べた人間はちよつと成金趣味だったらしいことが伺える。あまり品は良くない。寝室が無意味に――作った当時は必要性があったのかもしれないが――三つ。泳げるサイズの浴槽にジャグジー完備のバスルーム。人一人住めそうな大きさのトイレが三つ。付近の住民は「館」とか「お館」呼ぶ家。街一番の大豪邸。わたしはそこに一人で暮らしていた。

いつからこうなった？ 回答はいつでも同じだ。『いつからか』。つまり、気がついたその時にはもうこの館に住んでいた。けれど、おそらく殆ど全ての人はある日突然、無意識のまま大豪邸に住み始めたりはしない筈。だから考える。記憶を探る。目の前から、後ろ向きに記憶を辿って行く。しばらくは順調。食べたもの、感じた思い。嬉しかったこと、しんどかったこと。順番に、手探り。そこにはちゃんと過去がある。通り過ぎてきた場所がある。やがて辿りつくのは一年前。そこにある大きな壁。しばらく足搔く。結局負ける。

そして、何も見つからないままで目の前の暮らしに引き返す。そんな、連戦連敗が常だった。半ば諦めていた。見つかるあてのない探し物に没頭しているほど暇でもなかった。

＊

「明後日ぐらいね。待つてる人が来るみたい。その人、良い報せを持つてるよ。早く貴方に伝えたいのね。今は何か、最後の調整でもしているのかな」

わたしの仕事、〃予感〃。依頼してきた人間の事を、わたしは考える。そうすると、その人が近い将来にどうなるのかが見える。それを伝える。一文字につき二十円。「えっと」とか「そうねえ」とか、そういうフレーズ分は除く。こんなのが一日百五十件ぐらい。周囲の人々からは〃予感屋〃と呼ばれ重宝されていて、まあまあ繁盛。仕事は忙しくて、毎週金曜日の休業日以外は朝から晩まで仕事漬け。〃いつからか〃生業になつていたこの仕事は、正直嫌いじゃない。「あまり良くない病気みたい。うん、でも、死んだりはしないかな。しばらく辛いと思う。もしかしたら、諦めたくなっちゃうかもしれないけど、大丈夫だから。暗がりの向こうに明るいもの見えるよ。だからそんなに心配しないで」

「あの人ね……残念だけど、貴方に興味ないのかな。わたしには二人が上手くいく様子が見えないの。だから、今はもう少し積み重ねてみたら？ 興味を持ってももらえるように。好きになつてもらえるように、さ。そういうので、結構簡単に未来つて変わるの。頑張つてみることに無駄な事なんか一つも無いんだよ。未来を諦めちゃ、駄目」

「ちゃんとした場所までは見えないんだけど……貴方が優しさアベニューで笑っている感じがするの。もしかしたら何か、手がかりとかあるんじゃないかな」

こんな仕事が毎日来る。朝の十時から夕方、受付を終了する時間まで殆どひっきり無しに誰か来て、仕事、仕事、仕事。探し物をしている時間なんか何処にも無かったし、空いた時間には近くにある〃優しさアベニュー〃で甘いものを食べなければいけない。これはわたしがわたしに課したルール。その代わり、仕事は頑張る。わたしにとって甘味は生きる理由になり得るのだ。つまりわたしにとつて、つかみどころの内容な探し物に対する優先順位は極めて低い。なのに、考える。繰り返し、何度も考える。もしかしてわたしって、暇人？ そんな筈無いんだけど。

＊



【作者メッセージ】

はじめまして。ナツと申します。このたびはこのような場を下さりありがとうございました。創作と幕末が大好きな学生です。和モノとウサギが大好きなのでこのようなものばかり描いています。オリジナルを投稿するのが初めてなので緊張しますが少しでも楽しんで頂ければ幸いです。



手紙

美弥

私の日課——それは、毎日必ず、家のポストを確認すること。

時折、『誰かからの手紙でも待ってるの?』と知り合って間もない友人達に尋ねられる。

——そう、私は待っているのだ。彼からの手紙を。

『世界中を旅したい』という幼い頃の夢を叶えるべく、三年前に旅立った幼馴染の彼。

旅立ちのあの日、『手紙出すから、あまり寂しがるなよ?』と私に約束してくれたことを今でもはつきり覚えている。

忘れるはずがない。忘れられるはずがない。

彼が約束を破る人間ではないことは、私が一番よく知っている。

だから待ち続けているのだ。今でも、ずっと。



母はひどく心配性だった。

以前はおそらく自制心が働いていたのだと思うが、脳を患い手術を経てからはまるで、その弁が壊れてしまったかのよう到我慢をしなくなった。子供のような駄々をこねたり、子供のような心配の仕方をするようになった。私が職場から帰れない日に「嫌だ」と言って涙目になる。帰りが遅いと何度も、何度も電話がかかってくる。もう小学生じゃないんだから勘弁してよ、などと思いつつ患いを経て少しずつ弱っていく母に強く言うことも出来なかった。

あの地震の日もそうだった。何度も、何度も電話をかけてまるで繋がらなかったらしい。何とか深夜に帰り着くと、リビングでぐったりとした様子を見せながら「一人帰還」と母は呟いた。司令官か何かのつもりになっていたらしい。手術以来昼夜の感覚を見失った母は毎晩遅くまで深夜テレビを観ていて、特にローカル局のアニメがお気に入りだったから、或いは何かそういうSF系の番組の影響でもあったのかもしれない。家族全員帰還するまで寝ないぞ、と妙に張り切っていて、なんだかおかしかった。

秋口に大きな台風が関東地方にやってきた時もそうだった。何度も、何度も電話がかかってくる、「もう勘弁して」と言いたくなるぐらいに沢山の留守番電話が吹き込まれた。

削除するのも面倒なんだから、とメールで文句を入れた。家に帰り着くと母はベッドの上で子供みたいにくたされてた。もうこの頃になるとリビングに介護用ベッドを入れていた。歩行が困難になっていた。介護ベッドの上の司令官がつまらなそうに焼酎をすする、その様子はやっぱりなんだか、おかしかった。

「大丈夫だから」

そう伝えてみる。

「そんな事言ったって」

つまらなそうな声。心配してくれるのも有り難いし、待っててくれるのはすごくうれしいんだけど、だって、わたしには「出来るだけ早く帰れるように頑張る」ことしか出来ないんだよ。そんな意味のことを伝えた。

*

十一月の中旬頃から自宅に毎日介護福祉施設の人が来てくれるようになった。母の連続留守電は無くなりはしていなかったけれど随分回数が減った。声からは張りが失われ、吐く息も何処かつらそうなものに変わった。以前は「今、どこにいる」という主な用件以外にも周囲の状況や自分の気持ち


が一緒に吹き込まれた留守番電話には、短く「どこ？」としか吹き込まれなくなった。

2012年、明けてすぐ、母がとうとう自宅介護では危険があるという判断を下されて総合病院に移ることになった。衰えのペースが随分早まっていた。もう会話は殆ど出来ない状態で、携帯電話を使うことも出来なくなっていた。つい二か月前まで当たり前だった事の何もかもが奪い取られていた。毎晩欠かさなかった焼酎も飲めなくなったし一日にひと箱きっかり吸っていた煙草にも手が伸びなくなった。時間が少しずつ、一つの終わりへと突き進んでいる。それは私にもよく分かった。

*

一つの偶然が今、私の宝物になっている。投げ込まれては消し、を繰り返していた留守番電話のうち一通が、こういう弾みか携帯電話に一つ残っていた。全部消していたつもりだったのに。そこには「かけられるとき電話ください。どこですか？」と、まだ、ちゃんと発声出来た頃の母の声。

病院のベッドの脇、点滴や血圧計、酸素供給の管に繋がれた母は一日の大半を寝て過ごしている。会話は出来ない。



Yes, I'm "ME"

C.A.Rainbow

僕が僕という存在の何らかを探ろうと思う時、その先の風景はいつも雨降りだ。詳しく何かを覚えているわけではない。記憶の場所は時によって移ろう。公園でもあるし、昔ながらの古臭い家の縁側である事もある。高層ビルが立ち並ぶ街の片隅、駅のホーム、野球場の脇。雨はいつでも世界を覆っていて、雨はいつでも全てを押し流そうとしていた。そんな何もかもが煙る様々な場所で僕はいつでも一人でいた。

*

まず大切……であるかどうか分からないが、今の僕は既に一人ではない。家族ではないが、良くしてくれる人に迎え入れられ、それなりの平穏の中にある。食事に困るでなし、眠るに不便するでもなし。朝を待つて焦がれる事も無いし、夕闇を恐れる必要もない。退屈で退屈で、退屈な毎日だがこれ以上を望むのは贅沢という事なのだろう。どれだけ退屈の中で苛立ちを感じてもこの場所を離れたいとは少しも思わない。神、と呼ばれる存在に対して僕はとても懐疑的だけれど、仮にそのような存在がいるとしたら、僕に対してこの場所から動くべきではない、と何らかの力を働かせているのかもしれない。もっとも、神がそこまで暇だとも思わないが。

Sign From the PAST

北原 亜稀人

【後編】

歩いても、風景には何の変化も見られなかった。吹く風も同じだ。ほぼ一定の間隔で、湿った風とかすかな匂い。鎧の男が言うには、これもまた、『全部まとめて嘘』らしい。

「時間や距離の概念は世界を包む。けれどこの場所は、それよりも一つ外側にある……意味分らないだろ」

「どこの呪文よ、それ」

「良いよ、理解する必要なんか無い事なんだ。全部まとめて嘘なんだから。それよりさ、毎日どう？ 楽しく暮らしているのか？」

「あんたみたいなおかしなのが出てこなければ向こう当分楽しかったんじゃないかな。と言うか、何よ、嘘つて。嘘つきとか、わたしがもつとも嫌う人種なんですけど」

「ユタ君つてのは、友達？ そいつまで甘いものばかり食べてるんじゃないだろうな」

「あんた、わたしの何なのよ。遠い昔生き別れた家族か何かなわけ？ わたしがどんな暮らしでも関係ないと思うんだけど……良い人ばかりだし、仕事は楽しいし、ユタ君は大変良い子です。これで満足？」

「今の暮らし、好きか？」

MEYER